津幡の風を見つめて ④

津幡総局 リレー連載

人と愛着を集める湧き水

津幡町津幡地区には暴れ川がある一方、住民を喜ばせてきた水源もある。有名なのが同町清水（しみず）にある湧き水「しょうず」。漢字では地名と同じ「清水」と書く。

11月28日朝、地区の中心部に近い津幡公民館から北上してJR七尾線の踏切を渡ると、銀色に輝く円すいのふたが山裾に見えてきた。ふたの下にはコンクリート製の井戸があり、突き出た2本の管から、ちょろちょろと清らかな水が流れている。

この日はちょうど月に1度の清掃日。地元住民5人がほうきやブラシを準備していた。「そっちの落ち葉を掃いといて」「ふたを外すから、誰か反対側を持ってくれるか」と手つきは慣れたものだ。

どこを掘っても

同町清水はかつて、どこを掘っても水が湧き出たという。特にしょうずは池ができるほど水量が豊富で、昔から地元酒造店が仕込み水としても使った。現在は清水区の住民が毎月の掃除のほか、年4回の水質検査を担い、井戸として管理している。

「水をくむのに1時間待ちになることがよくあるんですよ」。管理係を務める中田由孝さん（76）＝同町清水＝は、軽トラックの荷台いっぱいにポリタンクを積んで帰った人を見掛けたことがあるという。「風呂の水にも使うんじゃないかってくらいだったね」と笑う。

あまりに混み合うため、清水区は2011年、取水口を1本から2本に増やした。

くみ取りは1時間待ち

それでも「名水」をいただこうと順番待ちになることは少なくないらしい。中田さんは「『湧き水があるから清水に引っ越してきた』とうれしそうに話す若い女性もいる」と自慢げだ。

しょうずから約80メートルほどの渡線橋では今年、クマが2度目撃されたが、住民の間では「クマも水を飲みに来とるんや」とうわさされているそう。今夏は例年以上に暑かったから「とにかく冷たくておいしい」という湧き水でクマものどを潤したのだろうか。

掃除を手伝っていた泉清昭さん（76）＝同＝は「昔はここで流しそうめんをやった」と思い返す。畑仕事を終えた農家が休憩したり、子どもたちが涼を感じ取ったりと地区に住む人たちにとって交流の場でもあったという。きれいな水だけに井戸の中ではメダカが悠々と泳いでいたそうだ。

地下水は硬度高く

リピーターが多い湧き水について、泉さんは「やっぱり味が違う」と胸を張る。

実際、町浄水場の水質検査結果を見ると、水道水用に地下約100メートルから取っている水の硬度（カルシウム、マグネシウムの濃度）は県内でも比較的高く、世界保健機構（WHO）の基準では中硬水から硬水に分類される。町の水道水は、この地下水と、軟水の県水道用水を混ぜて使っているが、しょうずはさらに軟水とされる。

金大環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授（地質学）に聞くと、地下水は長い時間を掛けて周囲のミネラル分を取り込むため、硬度が高くなる傾向がある。一方、裏山の伏流水とみられるしょうずは「流れが速く、ミネラルを含む前に湧き出ているのだろう」と話す。

掃除を終えた人たちと一緒にしょうずの水を飲んでみた。口当たりは確かにやわらかく、秋が深まってきてもひんやりと心地いい。この味わいが多くの人を魅了するのかもしれない。

中田さんは、しょうずを「住民にとって心のよりどころ」と表現する。地区外からも人を集める誇りの湧き水は、ここに暮らす人たちが地元への愛着を深める源泉にもなっている。

（津幡総局・谷内俊介）

湧き水「しょうず」の周辺を